

風紋

vol.54 2017 / Summer

鳥取大学広報誌 FU-MON



特集

工学のチカラで 地域の“安全・安心”に 貢献する

社会
貢献

動物と人との密接な関係を、
医・工・農学、そして産学連携の中で考える

話題の
研究

フィリピンで糖尿病患者の自己管理を支え、
『生活の質』向上を目指す

Student's
Voice

鳥大学生対談 大学祭実行委員編

学びを
支える

教育支援・国際交流推進機構
教員養成センター

新任教員
紹介

地域学部

工学のチカラで 地域の“安全・安心” に貢献する

鳥取県 中部地震の経験を 未来に生かして

山陰地方の地震研究を牽引

本学鳥取キャンパス周辺の穏やかな街並みを背に、お互いの健闘をたたえ合うように笑う二人は、鳥取県における地震研究の第一人者。西田良平名誉教授と、その志を継ぐ香川敬生教授。豊富な専門的知見と飽くなき探究心を持つ、地震と防災のスペシャリストだ。

西田名誉教授は、約50年間にわたり「微小地震」の研究を手がけてきた。M(マグニチュード)2以下の、人が感じられないような小さな地震を観測し、震源域の

特定、活断層との関わりなどを分析。「大きな地震が起きる前には、微小地震が増えることがよくある。つまり、微小地震研究は地震予測につながる」と名誉教授。長年の観測により、だんだん山陰の地震のクセが見えてきたという。

一方、香川教授の専門は「強震動地震学」。西田名誉教授が地下深くの地震活動を調べるのに対し、香川教授はその固い岩盤の上のついている堆積層が主な研究対象。「地盤が固いのか軟らかいのか、地震が起こったらどのように揺れが伝わり、被害にどう影響するのか。地下構造との関わりを調べることで、強い地震が発生したときの揺れを想定するのです」と解説した。

専門家の目で見た中部地震とは

中部地震発生直後、県の防災顧問を

務める二人に危機管理局長から電話が入った。専門家の意見が必要なので災害対策本部にすぐ来てほしい、という緊急の要請だった。即座に連絡を取り合って、役割分担を決め、西田名誉教授は鳥取県災害対策本部へ、香川教授は学生を伴って現地調査へ赴いたという。

「今回の地震の兆候は約1年前から始まっていた」と西田名誉教授は分析する。山陰地方には「大きな地震が起こる前に、ほぼ同じ場所で前駆的地震活動が発生する」という特有のクセがあり、平成27年10月以降中部エリアに起こっていたM4程度の群発地震活動や微小地震がそれに当たると推測できるからだ。災害対策本部では、そうした発生メカニズムや気象庁からくる地震情報の解説、予想される余震の最大震度とエリアなどを助言した。

3日間現地へ通った香川教授は、被害状況を確認しつつ、臨時余震観測を実施し、揺れの特徴を探った。その結果、北栄町の一部地域で建物倒壊が多かったのは、軟らかい地盤と建物が共振を起こしたからと読み解いた。逆に倉吉市内は地盤が固く、小刻みな揺れによる瓦の崩落が多かったのだという。

「鳥取は地震が起こらない所だと思っていた」とよく言われます」と香川教授。「しかし、震度2、3程度の地震は常に起こっているため、警戒を緩めるべきではない。鳥取では冬になると皆、大雪に備えてスコップや長靴を準備しますが、地震に対してそれぞれが当たり前前の意識を持って備えてほしい。二人は街並みを見つめながら、地域住民の安全を願った。



平成28年10月21日午後2時過ぎ、鳥取県中部を震源とする大きな地震が発生した。震源近くの地域では最大震度6弱が観測されたが、幸いにも本学の被害は皆無。工学部附属地域安全工学センターはすぐさま体制を整え、地元地域のため、地震の調査、被害状況の確認等に取りかかった。

山陰の地震の ホームドクター!

にしだ りょうへい
西田 良平
鳥取大学名誉教授

理学博士。1969年より鳥取県とその周辺の地震調査研究、地域防災に取り組む。2000年の鳥取県西部地震の際は鳥取県災害対策本部に入り、知見を生かして的確な指導助言を行った。これをきっかけに「鳥取県防災顧問」制度を提案、地震対策分野の顧問を務める。2008年、鳥取大学名誉教授授与。2016年「平成28年防災功労者内閣総理大臣表彰」受賞。

工学部附属 地域安全工学センター長

かがわ たかお
香川 敬生
大学院工学研究科社会基盤工学専攻 教授

博士(理学)。財団法人地域地盤環境研究所主席研究員を経て、2008年鳥取大学大学院工学研究科教授。JICA短期派遣専門家としてメキシコ、トルコでの地震観測・指導に関わった経歴も持つ。2016年、工学部附属地域安全工学センター長に就任。子どもたちの防災教育にも熱心で、要望を受けて地域の小学校に出かけている。

鳥取県 危機管理局長に聞く!

専門家の知見は 防災力向上に不可欠

災害や危機は予期せぬときに発生し、その様子は様々です。ゆえに防災対策・危機管理には専門家の知見が必要です。そこで鳥取県では、平成17年より「鳥取県防災顧問」制度を設け、鳥取大学を中心とした専門家の指導助言を仰げる体制を整えています。

鳥取県中部地震の際には地震対策の防災顧問である西田名誉教授が、発生から約1時間後に開催した鳥取県災害対策本部会議に来てくださいました。地震発生のメカニズム、予想される今後の余震等について助言いただき、その専門的知見は大きな指針となりました。また3日後には、もう一人の地震の顧問であり当日夕方から現地調査に入っていた香川教授が、今回の揺れの特徴、建物倒壊の危険性、被害状況を説明してくださいました。

鳥取大学との連携は災害発生時だけでなく、研究成果を被害想定や震災対策アクションプランに反映したり、地域住民の勉強会や活動のアドバイザーとしてご協力いただくなどしています。頼りがいを感じており、これからもより一層連携を深めていきたいと考えています。



お話を伺った人

鳥取県危機管理局
やすだ たつあき
安田 達昭 局長

鳥取県防災顧問とは?

県内に災害が発生した場合に、行政が迅速かつ的確な防災対策を実施するために、鳥取県からの要請に応じて専門的な立場から指導・助言を行う専門家集団。地震のみならず、津波・土砂災害・災害時医療・感染症等9分野にわたり12名が任命されており、内11名が鳥取大学教員である。災害発生時だけでなく、防災に関する施策の企画立案、県民啓発活動にも協力する。

地域の持続的な発展のために

地域安全工学センターの取り組み



工学の先進技術を結集し、地域社会の未来を創造する

工学部には、地震や津波、土砂災害に関する防災や危機管理の分野をはじめ、地域の産業や中山間地域の活性化方策、公共交通の利用促進等について、地域社会や行政と深く連携して取り組んできた歴史がある。しかし、少子高齢化、人口流出による地方の衰退がまだ続く中、地域の課題は深刻になる一方だ。

これまでは各研究室や分野が単独でこうした課題に関わってきたが、問題が多岐にわたったり、またそれぞれが複雑に絡み合う傾向にあるこれからは、小さな「点」が集まって大きな「面」となり、組織的に地域貢献に力を注いでいかなければならない時代となっているのではないだろうか。

そうした考えのもと、平成24年4月に設置されたのが「工学部附属地域安全工学センター」だ。「地域」と「安全」をキーワードに、3部門の研究分野を設け、地域社会とそこに暮らす人々の安全・安心と持続的な発展に寄与する目的で活動を展開している。

タッグを組んで課題に挑む

センター長の香川敬生教授は「工学のチカラで、将来にわたり安心して暮らせる地域を創造する」をテーマに掲げ、「研究者を束ねるとともに、部門を越えて関わり合える場にしていきたい」とセンターのあるべき姿を構想している。

そのビジョンを実現する取り組みが、早速始動している。国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）の戦略的イノベーション創造プログラム（SIP）に採択された「多層的な診断による地方自治体のインフラ維持管理システムの開発」プロジェクトだ。

専攻の黒田保教授を中心に、センターの3部門それぞれから研究者が参画。鳥取県とも連携して進められており、システムの早期稼働を目指している。

「いつか地域の安全・安心活動に関する全学のシンポジウムが開けたら」と香川教授。センターが地域の安全安心を担うキーステーションとなる日はそう遠くないだろう。

地域安全工学センターはこんなところ！



持続的の社会 /

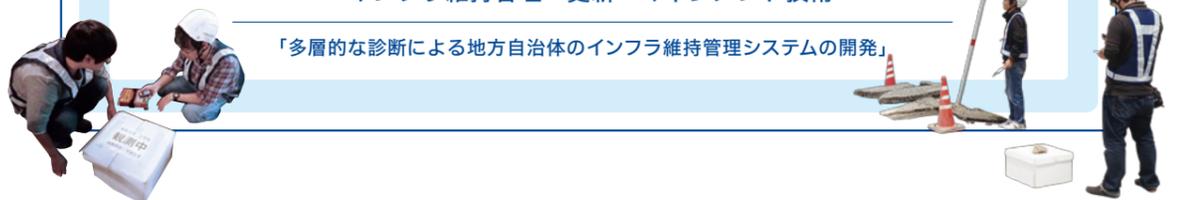
社会システム部門
持続的の社会 / 公共システム
協力 鳥取県内外の市町村 etc...



安全・安心社会 /
安全・防災部門
安全・防災 / 事業継続計画 (BCP)
協力 鳥取県危機管理局 etc..
情報化社会 /
情報システム部門
地域安全 / 生活安全
協力 バス会社・民間企業 etc..

戦略的イノベーション創造プログラム (SIP) インフラ維持管理・更新・マネジメント技術

「多層的な診断による地方自治体のインフラ維持管理システムの開発」



地域の防災・減災に努める

研究データを防災計画に反映

地震や津波による被害、集中豪雨による土砂災害など、近年日本各地で様々な自然災害が起こっており、そうしたニーズが流れるたび不安にかられる人が多いのではないだろうか。安全・防災部門では、地震の揺れや地下構造、津波・高潮、海岸浸食、河川・土砂災害、構造物の耐震、防災・減災、避難行動等、多様な分野にわたって工学的見地から研究を行っており、地域社会の安全と防災・減災システムの構築を目指している。

ように伝わり建物にどんな被害を及ぼすのかを研究している。「地震が起こっていても、車や列車の通過、海の波浪、風で木が揺れたりすることで、地面は常に揺れています。これを『常時微動』というのですが、地震計で常時微動を観測し地盤の振動特性を調べることができると、野口助教。多数のポイントで常時微動を計測するのは大変な作業だが、既に県内の主要エリアを網羅しており、10年以上のデータを蓄積。「こうしたデータは鳥取県における地震の被害想定に活用されている」という。まさに、研究成果が地域の防災に直結しているのだ。

学生も災害ボランティアで活躍

鳥取県中部地震の際には、社会システム部門を中心に現地の災害ボランティアセンターに教員と学生ボランティアを派遣した。学生らは研究で培った状況把握や分析の能力を発揮して、ボランティア派遣の優先順位決定、被災者のニーズ



のぐち たつや
野口 竜也
大学院工学研究科
社会基盤工学専攻 助教

調査とマッチング、派遣先の地図作成などをお手伝いしたという。混乱を極める被災地において、ボランティアの効率的な配分とそのバックアップを行うことは非常に重要だ。誰にでもできることではなく、その役割を担った功績は大きい。

部門では、小学校や公民館など地域の要望に応じた「防災教育」にも取り組んでいる。地震発生の仕組み、揺れの伝わり方などを楽しみながら学んでもらったり、防災グッズの作り方を教えるたり。野口助教は「子どものときから防災意識を身に付けておくことが大事。小学生らはきつとその日学んだことを家で家族に話すはず。そうやってより多くの人々に防災意識が広まっていくことを期待したい」と語った。安全・防災部門の真摯な活動に感謝せずにはいられない。



小学校での防災教育の様子

研究紹介

地表断層から地震の特徴を読み解く！

私は、「地震動と地表断層の関係」について研究しています。地表断層とは、地震の源である地下深部の断層のずれが、地表面にまで達することでできる地表面の亀裂のことで、昨年の熊本地震でも話題になりました。地表断層の出現の有無により、地震の揺れの特徴が異なることが過去の地震から知られており、その現象の解明は大きな課題です。地震動と地表断層の関係性を詳細に把握することができれば、地震動シミュレーションの高精度化につながると考えています。シミュレーション結果は、被害想定や建物の耐震設計等、幅広く用いられるため、高精度化を図ることは有意義です。地震大国である日本において、安全かつ住みやすい社会の実現を目指し、日々研究に取り組んでいます。



平成28年熊本地震の現地調査



よしだ しょうへい
吉田 昌平さん
大学院工学研究科(博士後期課程)
社会基盤工学専攻

鳥取県の中山間地域を照らす

地域に寄り添って最善策を模索

地方都市の中山間地では人口減少・高齢化が進んでおり、地域の衰退になかなか歯止めをかけられない現状がある。とりわけその状況が先行しているのが、ここ鳥取県だ。社会システム部門では、地域社会が抱える課題に迫り、人々が持続的に、かつ豊かに暮らしているような解決支援策の研究に取り組んでいる。

例えば、中山間地域を悩ませている課題のひとつに「買い物弱者」の問題がある。地元の商店街は、買い物客の減少と後継者不足、そして大型ショッピングセンターの進出で次々と閉店。地域住民は自宅か

ら遠く離れた店舗での買い物を余儀なくされている。自家用車があればまだよいが、路線バスを利用しての買い物は時間がかかる上、年配の方には体力的にきつい作業といえる。

そこで今、脚光を浴びているのが「移動販売」だ。買い物支援はもちろん、地域のお年寄りやコミュニケーションを図ることで健康状態の把握や栄養指導を行ったり、重い荷物の運搬、電球の交換といったちょっとした家事の補助など、あらゆる生活支援サービスとセットで提供することが可能。部門長の谷本圭志教授は、「鳥取県と連携して実態調査を行い、有効なサービスを提供する運営業者を支援する施策を提案、制度化をお手伝いしました」と近年の成果を語った。

現地の実情を肌で感じながら

研究を進める手法として大切にしているのが、実際のフィールドへ出かけていっての綿密な調査。住民はもちろん、行政や地元企業と密接な連携を図り、現地で地道な



鳥取県江府町にて移動販売車に同乗しながら利用者の実態を調査

聞き取り、実態調査を行うなど地域ごとの実情にマッチした社会システムの提案につなげている。

また、この分野では学生の存在も重要なエッセンスだ。大人では到底思いつかない柔軟なアイデアは、学内外にいい刺激をもたらしている。「地域の方もそんな学生らとの接点を求めていて、意見を聞きたい、手伝ってほしいといったお声をよく聞きます」と谷本教授。部門がそのつなぎ役になれば、と構想している。新しい着想もある。「AI（人工知能）は人の仕事を奪うと危惧されているが、過疎地はとにかく人手不足。AIはそれを補完できるアイテムなので、可能性を追究していきたい」と展望する。鳥取県を元気にする斬新な提案が楽しみである。

バスネットが公共交通を支える

路線バスの使い勝手がアップ!

情報システム部門が最も力を入れている取り組みは、地域住民の足である公共交通（路線バス、鉄道等）の利用促進と利便性向上を実現するシステム「バスネット」の構築だ。これは、鳥取・鳥根両県のほとんどの鉄道とバスの情報を網羅した経路検索サービスで、最新時刻データが反映されており、行き先に応じて最適な路線や乗り換え経路、所要時間を調べることができる。パソコンだけでなく、携帯電話やスマートフォンからのアクセスに対応している点も便利なお知らせ。アクセス数は月平均で約10万件とか。地

域住民に浸透し、頼られるシステムに成長していることに部門長の菅原一孔教授は目を細める。

また、目的のバスが今どこを走っているのか知ることができる「ロケーションシステム」も稼働中。地図上に現在運行しているバスのアイコンが表示され、それをクリックすると詳しい情報が分かるというもの。「通常時でも便利なシステムですが、特にロケーションシステムが力を発揮するのは冬場。積雪時にダイヤが乱れたときはアクセス数がグッと上がります」と菅原教授。

人口減少・高齢化が進む中山間地域を維持していくためには、公共交通というインフラが不可欠である。行政、各バス会社・鉄道会社と連携協力を図りながら、公共交通を守る役目を担っている。

皆で挑戦する面白さ

センター全体でバックアップする戦略的イノベーション創造プログラム「多層的な診断による地方自治体のインフラ維持管理

すがはら かずのり
菅原 一孔
大学院工学研究科
情報エレクトロニクス専攻 教授

たにもと けいし
谷本 圭志
大学院工学研究科
社会基盤工学専攻 教授



鳥取大学前駅に設置してあるタッチパネル式のバスネット

システムの開発」プロジェクト（3ページ参照）において、情報システム部門は、補修が必要なインフラの写真・データを収集し管理するデータベースの構築を担当している。「現在数カ所に分散しているデータベースをまずは一元化したい。そして、調査員が撮影したインフラ画像を診断して振り分け、きちんと整理した形で保存し、必要に応じては補修場所の地図が出て、工事の進捗状況が色分けによりひと目で分かるようなシステムの構築ができたら面白いですよ」と、アイデアを膨らませている。

医療福祉に役立つ工学技術の研究開発

専門は障害者支援で、パソコンやインターネットを利用した「支援者」の支援について研究しています。今春、本学大学院医学系研究科の臨床心理学専攻の修士課程を修了したのですが、私の興味関心や研究の方向性が一つの学問で収まらないと感じ、同大学院工学研究科の情報エレクトロニクス専攻の博士後期課程に進学することにしました。福祉現場では人員不足が叫ばれており、その解決の糸口はまだ見つかっておりません。しかし、職員をサポートするセンシング技術や人工知能等の「テクノロジー」を開発・研究し続けることで、支援者だけでなく、障害を持つ当事者の方々の環境もより良くなっていくだろうと思います。私も医学に役立つ工学技術の研究開発に携わっていきたくて考えています。



なかにた けいた
中谷 啓太 さん
大学院工学研究科(博士後期課程)
情報エレクトロニクス専攻



位置推定システム受信機の調整作業中

地方の就職者数の増加に向けて

現在、地方の大学生が就職の際に都市部へ流出することが大きな問題となっています。そこで私は、地方の就職者数の増加に向けた施策の方向性を明らかにする研究を行なっています。具体的には、国勢調査のデータを用いて大学生の就職の実態を把握し、どのような要因が就職先の選択に影響を及ぼしているのかを統計的に分析しました。その結果、給与面、正規雇用といった待遇面の良さはもちろんのこと、多様性に寛容であり、また、創造的で革新的な地域ほど就職者が多いことが分かりました。私は、公務員への就職を考えており、この研究で培った知識を生かして地域のために活躍したいと考えています。



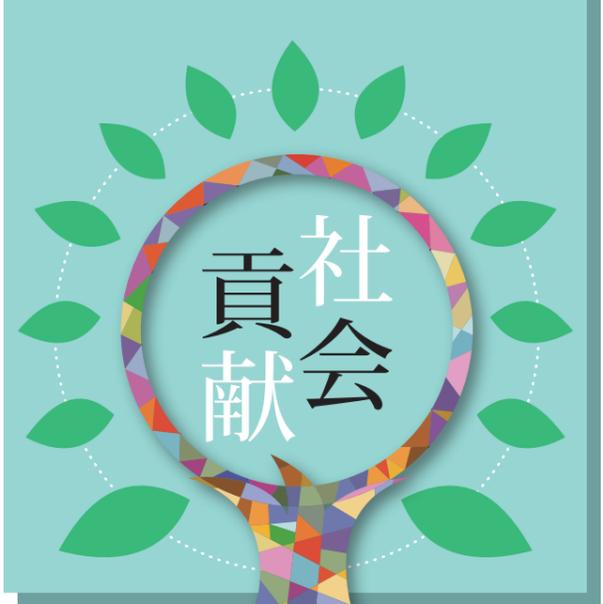
やまぐち ひろや
山口 博哉 さん
大学院工学研究科(博士前期課程)
社会基盤工学専攻



研究に用いるデータの整理中

研究紹介

研究紹介



社会 貢献



おかもと よしはる
岡本 芳晴 教授
 農学部共同獣医学科臨床獣医学講座

略歴
 1983年 北海道大学獣医学部獣医学科卒業
 1987年 同大学院獣医学研究科予防治療学専攻博士後期課程中途退学
 1987年 鳥取大学農学部 助手
 1998年 同大農学部 助教授
 2003年 同大農学部 教授

専門 獣医外科学(小動物外科専門医)/腫瘍学

趣味 詩吟/家庭菜園/ワイン/読書/海

動物と人との 密接な関係を、 医・工・農学、そして 産学連携の中で考える

動物と人間(ヒト)とのさまざまなかわり合いの中で、ヒトの医学や工学技術の進歩とともに獣医学も新しい研究テーマが立ち上がりつつあります。私は、創業をはじめ医療機器の開発、地域の獣医療体制の整備等について、専門的な立場から動物だけでなくヒトにもつながる獣医学の将来に向けた課題に取り組んでいます。

ヒトの病気のほとんどは、 動物にもある

平成26年に刊行されたバーバラ・ホロビッツ(米国の心臓専門医師)の『人間と動物の病気を一緒にみる』(共著)という本があります。その内容としては、ヒトにある病気のほとんどは動物にもあるということです。ヒトの死因の1位になっているがん(癌)についても、そのほとんどは動物にもあります。

米国では平成13年から(ヒトの)新規抗がん剤の開発に自然発症の動物を使用して効果を検証しています。これはマウスやラットに移植したがんを用いた抗がん剤の開発だけでは不十分だということが認知されたからだだと思います。検証の流れとして最初はマウス、ラットのような実験動物で安全性、有効性を確認し、次に自然発症の動物でその効果を検証。自然発症の動物で効果が認められた場合、ヒトへの臨床試験に進みます。その上で有

効性が認められなくなると、その創業開発は中止となります。近年、大手製薬企業ではペット(小動物)向けの薬剤開発が積極的に行われるようになりました。それは市場規模が大きいということもありますが、ヒトへの創業に密接に関連しているからだと思います。これは世界的な傾向で、とくに小動物分野では、工学技術も含めて基礎医学と臨床医学の「橋渡しの役割」を獣医学が担う方向にあるものだと思います。

地域資源を活用した創薬の研究へ

私自身は獣医外科学が専門ですが、特になん治療や創傷治療などを研究分野としています。がん治療では「免疫療法」や「光線力学療法(PDT)」、創傷治療ではキチン・キトサン(鳥取県特産のカニの殻などに多く含まれるバイオマス資源)を用いた創傷治療促進効果の解明、オゾンとマイクログラブールを利用した「オゾン療法」といった先端的な治療法を検証しています。

また、鳥取大学が研究を推進している「医・農・工(学)連携分野(医療機器開発、染色体工学、核酸医薬)などにおいて、



フコイダンの原料となるおきもぎく



フコイタンはもぐりや昆布、わかめといった海藻類のヌメリ成分の中に含まれる食物繊維。

マウスやラットなどの実験動物を用いて薬品等の評価を行っています。その検証を進めていくと、ペット、さらにはヒトへの効果が見込まれるものと期待できます。このような背景から、最近では医学の先生方から獣医学がさまざまな形で評価されるようになり、医学と獣医学の共同研究が進んでいます。

私の研究で創薬に関して例を挙げると、ひとつには「フコイタン」(海藻類に含まれる食物繊維)の活用研究があります。地元・鳥取の海産物企業と連携し、フコイタンにある機能性分析を10年ほど前から行なっています。フコイタンが有する「抗がん作用」や「軟骨再生促進作用」について、マウスを用いた検証を行いました。

その結果、がんの進行を鈍化させるなど、実際に抗がん作用があることがわかり、なぜ、そのような効用があるのかというメカニズムも次第に判明してきました。フコイタンには腸内環境を改善する作用(便秘解消など)があると考えられています。腸内環境は体全体の健康に深くかわることから、こうした作用が、抗がん作用をはじめとする様々な機能に波及している可能性があり、今後、腸内細菌にどのような影響を及ぼしていくのかを、さらに調査します。将来的にはフコイダンの機能性を活かしてサプリメントの開発につなげたいと考えています。フコイタン

を添加した新しい機能性ペットフードやヒトの医薬が生まれるかもしれません。このような産学連携の取り組みは、これからますます重要だと思えます。大学がある地元の優れた自然資源を生かし、地域の企業などと連携し、双方がもつシーズを合わせて「鳥取発」の製品開発等に発展させることができればと思います。

無獣医地域への獣医療体制の整備に向けての研究

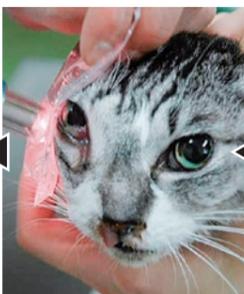
情報通信手段が発展しているなかで、ペットの飼い主さんはネットやSNSなどで様々な情報を得ることができ、一方で地方の獣医師さんは個人で開業されているのがほとんどで、学会や研修等に参加できないことも多いかと思えます。ここに「情報ギャップ」が生まれる可能性があります。また、人の過疎地と同じように、小動物などでも過疎地医療の問題が起きている。そこで私は、「無獣医地域」の離島などに対して、ICT(情報通信技術)を用いた診療のサポートのあり方を探っています。無獣医地域である島根県・隠岐の島の実情を例に、工学部・先端融合研究センターの教員、民間企業の協力を得ながら、遠隔地における獣医療のありかたについて現在研究を進めているところです。

日本には、ペットを含めて犬、猫が合わ

■光を用いた最先端がん治療



治療後3カ月経過した動物の顔



治療風景



先端がん治療前の動物(鼻腔内腫瘍)の顔



白内障手術風景

せて2千万頭もいるとされ、しかもそれが世界トップレベルの「高齢化社会」を迎えています。小動物から私たちが学ぶことはとても多いと思います。



研究の話題

たにむら ちか
谷村 千華 准教授
 医学部保健学科成人・老人看護学講座

略歴
 1997年 兵庫県立看護大学看護学部看護学科卒業
 1997年 鳥取大学医学部附属病院 看護師
 2007年 同大医学部保健学科 助教
 2011年 同大大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程修了(保健学)
 2013年 同大医学部保健学科 准教授

専門 成人看護学/慢性看護学/看護教育



写真2 患者会ボランティアによる運動指導



写真3・4 健診事業の風景



乾燥地や開発途上国等に関する研究・教育を展開する国際乾燥地研究教育機構のプロジェクトのひとつとして我々のチームは看護職、医師、歯科医、理学療法士、国際協力機構(JICA)からの出向職員で構成し、多職種がそれぞれの専門性を発揮することで糖尿病患者の生活の質向上を目指しています。

フィリピンで糖尿病患者の自己管理を支え、『生活の質』向上を目指す

フィリピンにおける糖尿病の有病率は年々増加している

糖尿病とは血糖値が上がる疾患で、放置すると腎臓や目、神経など全身に影響が出てきます。フィリピンは世界でも糖尿病患者の割合が多い国のひとつです。糖尿病は贅沢な食事をしている人に多いと思われがちですが、都市部の低所得者層にも多く見られ、フィリピンではその傾向が顕著です。背景として、ライフスタイルの欧米化とともに高脂・高糖、高カロリーの飲

食物が安価で手に入るようになったことが挙げられます。また、低所得者層の人々が糖尿病に罹患すると治療のために大きな負担を強いられ、重い合併症を発生しても、貧困や医療設備の不備のため十分な治療を受けることができません。

フィリピンでみえてきた対象地区の課題

対象地区は首都圏では最も所得の低い地域で、糖尿病死亡率はフィリピン全土の

対象地区では、糖尿病患者会が組織され、糖尿病クリニックでは患者ボランティアが血圧、血糖測定を行うなど、仲間同士の助け合い(ピアサポート)が行われていました(写真2)。医療者不足を補うピアサポートは地区の強みですが、患者ボランティアの知識不足や困難感、健診項目の不足、血糖測定方法や運動内容などの課題も見えてきました。そこで、我々は糖尿病患者のピアサポートシステムの構築を目標に掲げ、定期的な健診事業とピアリーダー育成のためのワークショップを活動の中心としました。

定期的な健診事業で患者の意識化と行動化を図る

第1回健診事業には145名の糖尿病患者が参加されました。過去1~2カ月の血糖値の平均を反映するヘモグロビンA1c(HbA1c)と生活の質(Quality of life:QOL)を主要評価項目とし、その他、合併症などの糖尿病関連指標や負担感、糖尿病に関する知識、管理への自信、自己管理行動などを測定しました(写真3・4)。患者の8割以上が高血圧症を有し、中性脂肪や善玉コレステロールは低値を示す者の割合が高く低栄養状態の者が多いことも推測されました。HbA1cは高値(7.0以上)を示し(図1)、8割が神経障害を有していました。また、

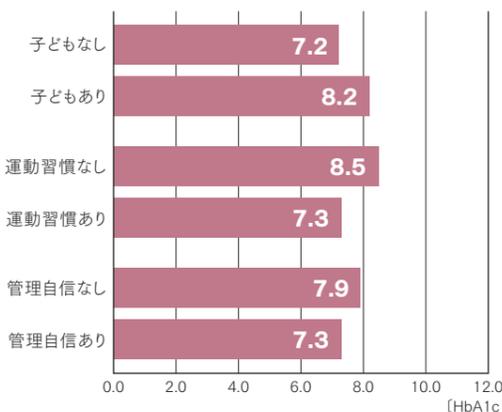


図2 生活状況、認識の相違によるHbA1cの比較(数値は低い方が血糖コントロールが良い)

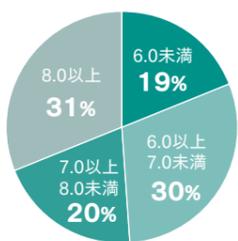


図1 HbA1cのレベル
 ※参加者の半数以上が高値(フィリピンでは7.0以上)を示した

子どもを持つ者、運動習慣のない者、自己管理への自信のない者は、そうでない者と比較してHbA1cが有意に高いことが明らかになり(図2)、自信や自己管理行動がQOLに関連していることも明らかになりました。貧困で子どもがいる家庭では自身の食生活を調整することの困難さがあるのではないかと考えられます。今後、患者の認識や生活状況に応じた血糖管理・合併症予防に関する対策を講じる必要性が考えられました。また、参加者が

ピアサポートシステムを支えるワークショップの開催

ワークショップでは、ピアリーダーの役割や患者支援に役立つコミュニケーションスキル、血糖測定などのトレーニングを提供します。また、ピアリーダーの糖尿病管理のための知識や自信、行動改善を目指すために、糖尿病の病態、運動・食事療法、口腔ケアなどを学びます。具体的には、他者から学ぶ、楽しさや達成感を感じるような運動やゲームを交えた講義、自ら選択する食事会など、参加者体験型の要素を取り入れます。事業の効果は、定期的な健診と面接を通して長期的に評価します。

患者支援は、異なる考えや生活をもつ人々と共感することが必須です。フィリピンの人々の考えや生活はスペインやアメリカ文化の影響を受けています。今回の事業を通じて、我々とは価値観の異なるフィリピンの人々に共感される患者支援を目指します。異文化社会で実現可能な方法は、日本での活動に広く応用できそうです。糖尿病患者全体の生活の質向上に貢献しつつ、患者会支援という日本の近未来に必要な医療を考えていきます。



写真1 対象地区の風景

Student's Voice

鳥大学生対談

大学祭実行委員編



ひとつのものをつくり上げるのって楽しい！

大学で新しいことに挑戦したい！
実行委員はそんな人にピッタリ！

▼芝原 錦祭実行委員会は、4年生までの全員が参加することになっています。イベント局、体育祭局、医学展示局、講演会局、会計局など11の局があって、必ずどこかの局に入ります。そこで私は1年のときから前・後夜祭なんかの企画や司会をやらせてもらっていたので、自然と幹部になる流れがあって実行委員長になりました。

▼山本 それで芝原さんが「一緒にやらないう？」と私を誘ってくれたんです。

違う新しいことができるんじゃないかと期待しています。

企画を一からつくり上げていく
苦労の中に成長と達成感がある

▼富樫 みんなで何かひとつのものをつくるのは充実感がありますよね。

▼高原 僕が1年生のとき新しく「お化け屋敷」の企画に挑戦したんだけど、周りからは「うまくいくはずがない」と思われていて。でも、メッチャ頑張って準備しておかげで、当日は行列ができるぐらいの大人気企画になりました。苦労した分、一番に残っている思い出です。

▼芝原 大学祭の準備をこんなに早くからやっているなんて知らなかったし、やるべきことが多くて大変ですよ。でも、自分たちの手で一からつくっていくのはやりがいがあります。

▼山本 確かに。思いを形にすることができると、完成がすごく楽しみ！

▼富樫 ただ、みんなの意見をまとめたり、情報を共有する難しさを実感しています。部署ごとに話し合った内容をメモにまとめてもらい、その内容を共有するようにしているんですが、高原さんが委員長のときはどうでしたか。

▼高原 僕の代も、議論した内容を責任者に報告してもらったよ。予定は詰まっていたし、最終的には実行委員長が全体をまと

▼富樫 僕も友達に誘われたのがきっかけですね。風紋祭実行委員会はサークル活動のひとつで、友達と一緒に見学に行ったら結構楽しそうだったので。

▼高原 確かに雰囲気がいいよね。僕は中学・高校ではイベントの実行委員なんてしたことがなくて、大学では新しいことに挑戦したいと思って入りました。

▼芝原 委員長は何年生がやるって決まっていますか。

▼富樫 2年生です。1・2年生がメインで、3年生はそのサポート。全員で約50人。学生会館の1室を借りて活動していて、

めないといけないから、そこは大事だよ。

▼芝原 錦祭でも各局長から次々と要望が上がってくるんですけど、全部実現するのは到底無理。書類提出も必ず遅れる人があるし、連絡を取って調整したりまとめるのは本当は大変です。

楽しいイベントが盛りだくまん
今年の大学祭もハジケアル！

▼富樫 錦祭は、今年はどうな企画を考えていますか。

▼芝原 実は今年錦祭は50周年を迎えます。それに掛けて「go」というテーマを決めました。記念行事を盛り込めるかどうかはまだ検討中だけど、模擬店、講演会、お笑いライブなど盛りだくさん。

▼山本 学生や地域の人たちから写真を集めてひとつの大きな絵にしていく「フォトアート」という企画もあります。

▼芝原 医学部ならではのイベントもあります。医学展示では病気の予防について取り上げる予定。「ぬいぐるみ病院」は、ぬいぐるみを患者さんに見立てて子どもたちに診療の体験してもらおうんですよ。風紋祭はどんなことをされますか？

▼高原 風紋祭は模擬店が90ぐらいあって、全国の大学祭の中でも出店数かなり多いほう。それは風紋祭の伝統であり、大きな見どころです。

▼富樫 去年好評だったスタンプラリーを

ステージ部署、模擬店部署、広報部署の3部署に分かれています。

▼芝原 錦祭は、正・副委員長5人と各局長13人が幹部で、4年生がやることになっています。あと、局員が約670人います。

▼山本 風紋祭のほうは規模が大きいのに、50人で回しているなんてすごい。一人一人がメチャクチャ大変じゃない？

▼高原 これでも人数が増えたほうなんです。2〜3年前は20人ほどで運営していたので、今はまだ随分楽。

▼芝原&山本 ええっ！？

▼高原 少し余裕ができたので、今までと今年もやります。スタンプを全部集めるとスピードくじができるんです。1等はなんとUSJのペアチケット！

▼山本 わあ、豪華ですね！

▼高原 ミス・ミスターコンテストも盛り上がりそうです。鳥大生全員の目がいくので。

▼芝原 以前のパンフレットを見たら、医学部からもミスコンに出場しています。出ていいんですか。

▼高原 全然大丈夫です。むしろウエルカム。一同 (笑)。

地域に開かれた大学祭でありたい
決意表明とお互いへのエール

▼高原 僕は今年の風紋祭のときに留学中なので手伝いができないけど、来場される方には模擬店を中心に楽しんでいただきたいですね。

▼富樫 オンラインな風紋祭になるよう、高原さんの分も頑張ります！

▼山本 私たちも早く仕事に慣れて、みんなの意見を反映した錦祭にしていけるよう頑張ろう。

▼芝原 そうだね。地域の方にもたくさん参加してもらって、「面白かった」「これからも続いたらいいな」と思ってもらえるようにしたい。風紋祭のときには錦祭のチラシを配りに行くので、よろしくお願ひします。

▼高原&富樫 お待ちしています！

第53回 風紋祭

2017/10/7(土)~9(月)

今年のテーマは『多彩・喝采・風紋祭』

疲れたときは
芝生の上で休憩！

留学に向けて
スペイン語勉強中！



第53回実行委員長

農学部
生物資源環境学科2年
とがし けいすけ
富樫 佳祐さん
静岡県浜松市出身



第52回実行委員長

農学部
生物資源環境学科3年
たかはら よしき
高原 慶貴さん
大阪府吹田市出身



昨年の風紋祭の様子

第50回 錦祭

2017/10/27(金)~29(日)

今年のテーマは『go』

錦祭

米子

風紋祭

鳥取



昨年の錦祭での
フォトアートの様子(上)と
今年の会議の様子(右)

洋画・洋楽が
好きです♪



第50回副実行委員長

医学部
医学科3年
やまもと りさ
山本 里紗さん
兵庫県尼崎市出身

サッカー部の
マネージャーです♪



第50回実行委員長

医学部
医学科4年
しばはら めぐみ
芝原 萌さん
大阪府豊中市出身

私の専門は日本民俗学の流れを汲む生活論です。生活論とは、人々の平凡な毎日や何気ない日常の風景に「庶民の生活知」を感じとり、そこから人生や社会のありようを学ぶ学問です。例えば、私の日課となった温泉通いそのものが研究（フィールドワーク）になります。鳥取には「なにもない」と言いますが、そここそが時代の最先端のようです。

「カランコロン、カランカランコロン」と、温泉帰りに下駄の音を奏でながらネオンが灯らない多くの雑居ビルを眺めていると、グローバル市場や文化からの「遠さ」とはこれかと実感します。ところが一方で、ネットや飛行機などを使いこなしてグローバル市場や文化との「近さ」を保ちながら、鳥取の「ゆつくりとした時間」を満喫するI・Uターンの若者に多く出会います。彼らの振舞は、グロー

その経験と想いに学ぶ



地域学部地域学科地域創造コース

むらた しゅうすけ
村田 周祐 准教授

略歴
2012年 筑波大学大学院人間総合科学研究科修了博士(学術)
2012年 東北福祉大学総合福祉学部 助教
2015年 東北福祉大学健康科学部 講師
2017年 鳥取大学地域学部 准教授

専門 村落社会学/生活論
趣味 妻と3人の娘たちと遊んでもらうこと/落語/放浪

バルとの「近さ」は私たちに安心を与えてくれるけれど、束縛し自由を奪うのだ、ということに気付かせてくれます。そうなのです、彼らは酸いも甘いも噛み分けたうえで、グローバルとの「近さ」と「遠さ」を同時に味わうために鳥取の地に暮らしているというのです。

彼らの存在は、グローバル市場や文化との「距離」が意味と言葉を与える時代、それを可能とするモビリティ技術の発達、そしてその最先端に鳥取があることを教えてくれます。

日々のなかで出会う方々の経験と想いに学ぶことで、自分の「あたりまえ」を書き換えながら、これからの地域や社会のありようを考え続けたい。その繰り返しを、時代の最先端である鳥取の地で紡ぎあげていきたいと思っています。



地域学部地域学科国際地域文化コース

かわいだ さちこ
川井田 祥子 教授

略歴
2000年 シアター・應典院 デレクター
2004年 NPO法人都市文化創造機構 事務局長
2009年 大阪市立大学都市研究プラザ 特任講師
2012年 大阪市立大学大学院創造都市研究科修了博士(創造都市)
2017年 鳥取大学地域学部地域学科 教授

専門 文化経済学/創造都市論
趣味 銭湯めぐり

文化芸術の役割を理論と実践の両面で伝えたい

平成29年4月に地域学部地域学科に着任しました。専門は文化経済学をベースにした創造都市論です。

シアター・應典院(大阪市)でディレクターとしてアートフェスティバルや演劇祭などの企画運営を行う中で、文化芸術が社会に果たす役割を言語化したいと考えるようになり、創造都市論と出合って大学院に入学しました。

『創造都市』とは「市民一人ひとりが創造的に働き、暮らし、活動する都市」のことで、この考え方を取り入れて『創造農村』をめざす小規模な自治体も着実に増えています。経済的価値のみを基準にすれば「何もなし」「何もできない」と考えられがちな地域や人々(限界集落や障害者など)であっても、文化的価値や社会的価値を表現していることは確かです、それらを顕在化させるためには文化芸術の果たす役割は大きいと考えられます。たとえば近年、日本の障害者施設でアート活動を取り入れるところが増えています。障害者が絵画などの表現活動を行い、周囲の人々から評価されることによって自己肯定感が高まることは、社会的包摂の重要な要素なのです。

研究と並行して10年余、NPOの活動を通じて創造都市・創造農村をめざす自治体の取り組みを支援し、創造都市ネットワーク日本^{*}の設立にも尽力してきました。その経験を活かしながら、地域にも貢献したいと考えています。

※2013年1月設立。2017年5月時点で92自治体、35団体が加盟。鳥取県も加盟している。

教育支援・国際交流推進機構 教員養成センター



「開放養成」のメリットを生かし、高度な専門性と人間発達の理解を深める教員養成を支援しています

教育支援・国際交流推進機構 教員養成センター長

やべ としあき
矢部 敏昭 教授

略歴
1998年 鳥取大学教育学部 教授
2004年 同大地域学部 教授
2005年 同大附属中学校長
2009年 同大地域学部長
2011年 同大副学長

専門 数学教育学/問題解決及び目標・評価論
趣味 読書/音楽/ゴルフ

教職について、いつでも相談

本学での教員養成は、旧教育学部を中心とした体制から移行し、全学(学部横断)的な「開放養成」の形態に変えた経緯があります。これは本学の教員養成の特徴でもあります。その流れの中で、教職を目指す学生への教育支援をより充実させるため平成25年に設置したのが「教員養成センター」です。

センターの教務は多岐にわたります。教員養成カリキュラムの開発、教育実習の企画・立案、学生教育ボランティアの推進、学校教育課題の解決に向けたプ

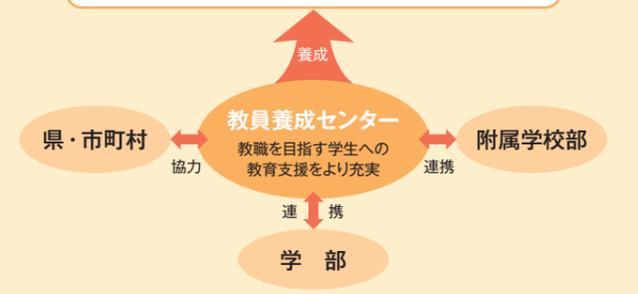
ロジェクト研究、さらには現職教員の教員免許更新講習・研修も行っています。教職を目指す学生は、本学では地域学部をはじめ工学・農学部にたくさんおられますが、教職についてさまざまな疑問や不安をもつ学生も多いことでしょう。そこでセンターには「教職相談室」を設けており、進路や教員採用試験についてなど幅広く相談を受け付けています。相談件数はセンター開設の初年度が年間50件ほどだったのが、昨年は600件ほどと、かなり増えていきます。学生にセンターの活動の認知度が広まり、相談したいことが実はたく

現職教員と学び合う機会づくり

センターの取り組みの中で、学生に最もニーズの高いプログラムのひとつに「学び・遊び・つながりプロジェクト」があります。これは本学にある附属学校園と連携し、学生が現職教員と一緒に学び合える貴重な機会となっています。たとえば、学校現場での児童・生徒指導や学級運営の進め方などを若手教員とフリーにディスカッションする「学び」の座談会や、小・中・高校のエキスパー

さんあることの証かもしれません。

高い実践指導力を有する教員を養成



ト教員(県の認定教員)から授業づくりやクラスづくりのノウハウを学ぶ「学び」の教室など、5つの教室を設けているのですが、学生の申込数が定員をオーバーするくらい人気があります。

大学4年間で、学生の課題とその解決に向けた意識も次第に高まっています。私たちはそのような学生の成長過程をフォローしつつ、さまざまに自覚をもって教壇に立つまでを見守っています。成長していく子どもたちの姿に寄り添い、人を育てる、共に育つ「人間発達」が、どれほど素晴らしい魅力的なことかを感じていただきたいと思います。

附属幼稚園 創立50周年記念式典・祝賀会を挙

2017.6.17



鳥取大学附属幼稚園は、今年創立50周年を迎え、記念式典及び祝賀会を挙行しました。

幼稚園遊戯室で行われた式典には、豊島良太学長、鳥取県教育委員会山本仁志教育長をはじめ、大学関係者、歴代懇話会役員、旧職員、園児など約80人が出席しました。

附属幼稚園は、昭和42年6月19日に鳥取大学教育学部附属幼稚園として開園しました。当時は鳥取大学教育学部附属小学校（鳥取市尚徳町）内の一教室を保育室として借り、昭和45年3月、現在地である鳥取市湖山町に園舎を新築・移転しました。その後は増改築を繰り返しながら現在に至っています。記念式典に参列した年長児と年中児が「お祝いのことばとうた」を元氣な声で披露し、幼稚園の50歳のお誕生日をお祝いしました。

第62回鳥取大学動物慰霊祭

2017.6.16



第62回鳥取大学動物慰霊祭が動物慰霊碑前（動物医療センター前）で執り行われました。学長、理事・副学長をはじめとする教職員、鳥取県の農林関係機関および小動物開業獣医師、獣医学科学生、飼主の方などが参加しました。動物医療センターでの手厚い看護の甲斐なくこの世を去った動物たち、あるいは獣医学の教育および研究のために命を捧げた動物たちに感謝と哀悼の意を表し、学生代表の農学部獣医学科6年石川拓郎さんが「獣医師を志す私たちが彼らの命に報いるには、これから獣医師として何をやるかに懸かっていると思います。私たちは一層勉学に励み、将来獣医師としてその責務を果たすことを誓います。」と慰霊の辞を述べました。

附属特別支援学校が 第47回「学校図書館賞」を受賞

2017.6.2



鳥取大学附属特別支援学校が、第47回「学校図書館賞（実践の部）」（日本図書館振興会及び公益社団法人全国学校図書館協議会主催）を受賞しました。本賞は、学校図書館の経営・運営、読書指導等において、卓越した実践を展開し、学校図書館または子どもの読書の発展に貢献した個人および団体に贈られる賞で、受賞テーマは「一人一人のニーズに応じる『知の拠点』としての学校図書館をめざして～知的障害特別支援学校の挑戦」。併せて「村松金治賞」も受賞しました。特別支援学校では、司書室や視聴覚ライブラリーなどの整備のほか、司書教諭を中心に障害特性や発達段階に応じた分かりやすい利用環境整備や、読書の実態把握と個のニーズに応じた図書館サービスの提供などを行っています。



WHAT'S NEW?



大学の動き

在学生の活躍や大学の取り組みなど、
鳥取大学の最新情報をご紹介します。

2017乾燥地研究センター 一般公開を開催

2017.7.22



2017乾燥地研究センター 一般公開及び小学生向け実験イベント「きみもなろう!砂漠博士」を開催しました。一般公開では、実験室見学ツアーや砂丘ナイトツアー、また、留学生による外国料理の提供コーナー、砂絵作りコーナー、アリドームライトアップなどが行われました。「DNAと遺伝子について学ぶ」と題して行われた小学生向け実験イベントでは、実際にプロクローリーからDNAを取り出す実験を行い、また、DNAや乾燥に強い植物の遺伝子などについて学びました。今年度は本館改修工事のため、例年より規模を縮小しましたが、研究内容を紹介したり、異国の文化に触れたり等、どの企画も好評で子供から大人まで楽しんでいただけました。

鳥取県警察との連携・協力に関する 協定書締結

2017.7.20



鳥取県警察と鳥取大学はこれまで、犯罪被害予防のための講演会や講義の開講のほか、本学の学術専門領域を活かしたサイバーセキュリティ対策等の諸活動において協力してきました。このたび、相互の連携・協力活動をさらに推進し、県民の福祉向上に寄与することを目的とした包括協定を締結しました。締結後の挨拶で、井上鳥取県警察本部長は「安全・安心な社会を実現していくためには、県警察と知の拠点である鳥取大学とが組織的な連携を強化し、様々な課題に協力し合える環境を構築することが今後における有効な方策の一つである」と述べられました。今後は、県警察での学生のインターンシップや県警察からの受託研究、国際テロなどの危機管理のための講演等を行う予定です。

日本学生陸上競技個人選手権大会 6位入賞

2017.6.10



Shonan BMW スタジアム平塚（神奈川県平塚市）で開催された、2017日本学生陸上競技個人選手権大会 男子400mにおいて、本学の陸上競技部に所属する池田弘佑君（医学部医学科4年生）が、見事、6位入賞を果たしました。男子400mには、参加標準記録47秒60を突破している日本と台湾の学生59名がエントリーし、池田君は予選、準決勝と勝ち上がり、決勝で48秒06の記録（自己ベストは予選で記録した47秒46）により入賞しました。

続いて、西日本インカレ（H29.6.30～7.2）に出場し8位入賞。9月に開催される全日本インカレへの出場要件である参加標準記録47秒20の突破を目指し、8月に行われる記録会に出場します。

「鳥取県4大学間の単位互換に 関する包括協定書」を締結

2017.6.5



鳥取大学では、「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+事業）」に取り組んでおり、この取組のひとつに「事業協働地域（鳥取県内）が要請する人材を育成するための教育」の構築があります。この取組を実現させるため、この度、県内の4大学（鳥取大学、公立鳥取環境大学、鳥取看護大学、鳥取短期大学）間の交流と協力を振興し、教育課程の充実を図ることを目的として単位互換に関する包括協定を締結しました。大学間の教育資源を提供、補完しあうことによって、学生にとって教育効果の高い、幅広い教養を身に付けることが可能となり、学生の地元定着を継続的に動機付け、県内の企業が求める人材の育成をするための教育を目指しています。

大学からのお知らせ

INFORMATION

平成29年春の叙勲において、本学関係の受章者は、以下の方々です。このたびの受章、誠にありがとうございます。

瑞宝中綬章

飯野 晃啓 名誉教授(教育研究功勞)

徳高 平藏 名誉教授(教育研究功勞)

吉谷 昭彦 名誉教授(教育研究功勞)

瑞宝双光章

平田 吉春 元 医学部附属病院診療放射線技師長(保健衛生功勞)

瑞宝単光章

大草 智子 元 医学部附属病院看護部長(看護業務功勞)

【叙勲受章】

鳥取キャンパス

10/7 SAT

風紋祭
開催
期間中

米子キャンパス

10/28 SAT

錦祭
開催
期間中

両日ともに10:00~12:30

両キャンパスともに大学祭開催中に行ないます！鳥取大学がどんなところか知りたい人、鳥取大学を志望している人、悩んでいるから行ってみたい人など、鳥取大学に少しでも興味がある人は是非ご参加ください。

【秋のオープンキャンパス開催！】



鳥取大学の  をつぶやきます！
とりりん公式ツイッター
はじめました！

フォローしてね

@tottori_univ

とりりんから大学のイベント情報、学生活動、キャンパスの様子などの情報をどんどんツイートしていくよ！
みなさん応援よろしくお願いします。

本学はいま夏休み。帰省するもの、課外活動で充実した時を過ごすもの、卒業研究等に励むもの、それぞれの夏、皆様はいかがお過ごしですか。

本号では、特集記事として、工学部附属地域安全工学センターの取り組みについて、「工学のチカラで地域の安全・安心」に貢献する」をお届けしました。平成24年4月に産声をあげたばかりの組織ですが、地域の人々の安全・安心と発展に寄与するべく活動しています。本稿を通してその「縁の下」の力持ち的存在を身近に感じてもらえたら幸いです。

さて、秋はすぐそこまで来ています。大学祭のシーズンです！10月には風紋祭が湖山で、錦祭が米子で開催されます。期間中には鳥取大学を志望する「あなた」のために、秋のオープンキャンパスも同時開催されます。お時間が許せば、学生たちの熱い思いをかたちにした大学祭と一緒に楽しめませんか。新しい発見があるかもしれません。その際は、本号【鳥大学生対談】大学祭実行委員編のチェックもお忘れなく。

編集後記
EDITOR'S NOTE

Circle Activities

「ぼくがそばにいるよ」は、児童養護施設に行き、小学生・中学生の子どもたちを中心に学習支援を行うボランティアサークルです。学習支援以外にも、施設でのイベント参加や、サークルでイベントを開催して子どもたちと楽しく交流しています。昨年度は、ピクニックとクリスマス会を行いました。現在は部員8名で活動しています。活動は毎週金曜日に行っていて、兼部や勉強との両立がしやすいです。しかし、現在は部員数が減少し毎週活動を行うのが難しいこともあります。

児童養護施設と聞くと様々なイメージを持つ方もいると思うのですが、とても明るく人懐っこい子が多く、一緒に勉強をするのを楽しみにしています。



代表 かとう のぞみ 加藤 望さん 医学部 保健学科3年

副代表 あきえだ かな 秋枝 叶さん 医学部 保健学科4年

サークル紹介

ぼくがそばにいるよ
(子供交流ボランティア)



昨年の大山ピクニックとクリスマス会の様子。

これからも、子どもたちと楽しめる活動ができればいいと思います。

来ていて、私たちが楽しく活動しています。子どもと部員が1対1で学習支援を行うことが多いので、子どもたちと部員の距離が縮まりやすく、みんなとても仲良しです。

学習支援やイベントを行っていて、子どもたちの笑顔を見られたときや、子どもたちに「楽しかった」と言われたときは、嬉しくなるし、やりがいを感じます。そして、部員たち自身もそれに元気づけられています。イベント企画などの際に、子どもたちの安全に配慮した上での企画を行なければならないので難しいと感じる部分もありますが、子ども好きな部員が多いこともあり、みんなで楽しく企画しています。

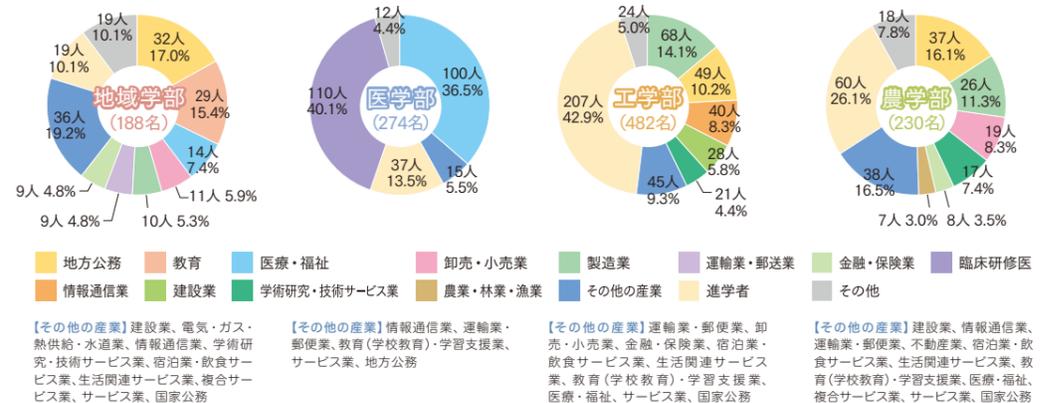
平成28年度 学部卒業生の就職状況・進学状況 (平成29年5月1日現在)

	卒業生	就職率(対就職希望者)	進学率(対卒業生)
地域学部	188名	98.7%	10.1%
医学部	274名	100.0%	13.5%
工学部	482名	98.0%	42.9%
農学部	230名	98.1%	26.1%
全学部	1,174名	98.5%	27.5%

(参考：国公立大学卒業生の4月1日現在の就職状況 平成29年3月卒…97.3%(文部科学省・厚生労働省調査))

平成28年度 卒業生の産業別就職状況 (総務省 日本標準産業分類による)

※学部名下の()内の数字は卒業生数



就職情報

JOB HUNTING INFORMATION





読者アンケートにご協力いただいた方へ
プレゼントが当たる!

今後のよりよい誌面作りのために、皆様からのご意見やご要望をお待ちしています。アンケートにご協力いただいた方の中から抽選で20名様にプレゼントを進呈いたします。

鳥大オリジナルタオル 20名様



← 長さ81cm →

鳥大のロゴが入った厚手のフェイスタオルです!

アンケートのご回答はこちらから

プレゼント応募締切 | 9/29(金)

※ご記入いただいた個人情報はプレゼントの発送以外には使用いたしません。また、当選者の発表は、発送をもって代わらせていただきます。



大学からのお知らせ

INFORMATION

申込不要
受講料無料

サイエンス・アカデミーのご案内

日時 毎月第2・第4土曜日 10:30~12:00
会場 鳥取県立図書館 2階 大研修室(鳥取市尚徳町101)
お問い合わせ 鳥取大学研究推進部社会貢献推進課

TEL 0857-31-6777

テーマ 芸術・文化の可能性

テーマ	講師
8/26(土) 2017 地域とアート 鳥取から見える文化芸術政策の未来	地域学部 准教授 竹内 潔
9/9(土) 2017 石原吉郎・香月泰男作品に見る、シベリア抑留体験	地域学部 准教授 岡村 知子
9/23(土) 2017 ダンスの持つ可能性 イギリスにおけるコミュニティダンスと鳥取で行われている試みについて [秋分の日]	地域学部附属 芸術文化センター 講師 木野 彩子

信頼と笑顔

地域に感謝

move your heart

鳥取銀行は、お客さまの明るい未来と活力あふれる地域を創造する銀行を目指します。

共生の里づくり支援事業



鳥取砂丘の清掃活動



鳥取大学「鳥取銀行講座」



ネーミングライツによる地域支援



とりぎんバードスタジアム



とりぎん文化会館

TOTTORI BANK



青い鳥の銀行です。

鳥取銀行

風紋のバックナンバーは、こちらから
www.tottori-u.ac.jp/fumon

鳥取大学広報誌

検索

鳥取大学に関するお問い合わせ

■入学試験	0857-31-5061	■研究・産官学連携	0857-31-5608
■公開講座・社会貢献	0857-31-6777	■学生・学生生活	0857-31-5053
■授業料納入	0857-31-5029	■学生就職支援	0857-31-5456

その他はホームページ www.tottori-u.ac.jp/ask をご覧ください

編集発行 / 広報委員会 広報誌編集専門委員会

2017年8月発行

山下博樹(委員長・地域学部) 筒井宏樹(地域学部) 西村正広(医学部) 塩崎一郎(工学研究科)
遠藤常嘉(農学部) 滝波稚子(教育支援・国際交流推進機構) 山岸大輔(産学・地域連携推進機構) 西尾瀧雄(総務課)

〒680-8550 鳥取県鳥取市湖山町南4-101 TEL.0857-31-5006 FAX.0857-31-5018
[E-メール] toridai-kouhou@ml.adm.tottori-u.ac.jp [ホームページ] http://www.tottori-u.ac.jp

*本誌掲載の写真、図版、記事などの無断複写・転載を禁じます。

表紙題字: 住川英明(地域学部)

